

1 苗立枯性病害

A 発生生態

- 1 リゾクトニア属菌、ピシウム属菌、フザリウム属菌が関与する。リゾクトニア属菌による立枯や根腐れは、土壤温度が20℃以上で多発する。ピシウム菌によるものは12～20℃で発生が多い。また、フザリウム菌によるものは高温になるほど多発し、15℃以下では少ない。
- 2 一般に高温期には種する作型で発生が多く、多湿土壤では特に発生しやすい。

株腐病（リゾクトニア菌）



根部の病徵（リゾクトニア菌）



立枯病（フザリウム菌）



根部の病徵（フザリウム菌）



B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 発病ほ場では連作を避けるか、夏季高温時の栽培を避ける。
- 2 ほ場の排水を良くし、かん水は多すぎないように適正に行う。
- 3 発病株は早急に除去し処分する。

3 ウイルス病

A 発生生態

- 1 モザイク病の病原ウイルスは、ビートモザイクウイルス（BtMV）、インゲンマメ黄斑モザイクウイルス（BYMV）、ビートえぞ性葉脈黄化ウイルス（BNYVV）、キュウリモザイクウイルス（CMV）、タバコモザイクウイルス（TMV）、カブモザイクウイルス（TuMV）の6種が知られており、BNYVVは土壌伝染、TMVは接触伝染と土壌伝染する。BtMV、BYMV、CMV、TuMVはいずれもアブラムシ類により伝搬される。
- 2 アブラムシ伝染によるモザイク病は、生育初期に感染すると被害が大きい。特に8～9月まきのものでは発生が多いので注意する。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 イネ科作物やネギ類の間作を行う。
- 2 輪作を行う。
- 3 ほ場周辺の雑草は媒介虫の増殖源となるため、除草を行う。

C 薬剤防除のポイント

媒介虫（モモアカアブラムシ）の防除を行う。

BtMV、BYMV、CMV、TuMV：アブラムシの防除を行う。

4 ホウレンソウケナガコナダニ

A 発生生態

- 1 は種後、かん水により土壤が多湿となると土壤中で増殖を始める。2～3葉期までは植物体上での寄生量は少ないが、加害を受けた葉は奇形となる。密度が高まると芯止まりとなり枯死する。
- 2 土壤中の収穫残さや未分解有機物が発生源と考えられるが、体長0.5mm内外と微小なため肉眼での確認は困難である。
- 3 本種は、新芽、新葉部に集中して寄生し、展開葉ではこぶ状の小突起を生じ、葉全体が光沢を帯び縮葉し奇形となる。中心葉は加害により小孔があき、その周囲は褐変する。被害株は、ほ場の一部に連続して分布する。
- 4 卵から成虫までの期間は20°Cで17～28日、15°Cで25～33日である。25°Cでは全く増殖できない。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 収穫残さは、ほ場外に持ち出し処分する。
- 2 有機物を入れる場合は十分に完熟したものを用いる。

5 ミナミキイロアザミウマ

A 発生生態

- 1 夏まきで被害が多い。
- 2 新葉が加害されると被害が大きくなる。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 は種後、水分管理を十分に行い発芽揃いを良くし、被害の多い4葉期までの生育日数を極力短縮する。
- 2 雨よけ栽培では、近紫外線除去フィルムを使用し、成虫の侵入を防ぐ。

C 薬剤防除のポイント

新葉への加害を防ぐために、生育初期に薬剤散布を十分行う。

6 モモアカアブラムシ

A 発生生態

- 1 夏まきや秋まきホウレンソウに被害が多い。
- 2 乾燥した年に発生が多い。
- 3 モザイク病の病原ウイルスを媒介する。

B 化学薬剤以外の防除方法

晩秋まき及び春まきをすると被害が少ない。

7 シロオビノメイガ

A 発生生態

- 1 ケイトウ、アカザ、フダンソウ等にも寄生する。
- 2 幼虫の発生は不揃いで、7月以降に連続して発生し加害する。
- 3 夏まき及び秋まきに発生し、秋期の気温が高いと発生が多くなる傾向がある。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 は種時期を遅らせる。
- 2 ほ場周辺のアカザ等の雑草を除去する。また、周辺にケイトウ、フダンソウ等を栽培しない。

8 ハスモンヨトウ・ヨトウムシ（ヨトウガ）

A 発生生態

- 1 ハスモンヨトウの成虫は3月から発生が見られ、8月以降急激に増加する。被害は秋期に著しい。ヨトウムシの第1回成虫は4月上旬～5月中旬、第2成虫は9月上旬～10月上旬に現れ産卵する。被害は秋期に著しい。
- 2 産卵は、両種とも卵塊で行われる。ハスモンヨトウの卵塊は、表面を褐色の鱗毛で覆われることが多いが、ヨトウムシでは直接卵が確認される。
- 3 両種とも幼虫はふ化後しばらく葉裏で集合して食害するため、被害初期には表皮のみを残したすかし状の葉が見られる。

ハスモンヨトウの幼虫



B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 施設開口部を4mm目の防虫ネットで被覆し、成虫の侵入を防ぐ。なお、ハスモンヨトウは防虫ネット上にも産卵し、ふ化幼虫がハウス内に侵入するので、卵塊の除去を併せて行う。
- 2 卵塊や分散前の若齢幼虫を除去する。

C 薬剤防除のポイント

- 1 ハスモンヨトウは、病害虫防除所のホームページ(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>)に掲載される情報(トラップデータ等)を参考にして適期防除に努める。
- 2 幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるため、若齢幼虫による被害葉(すかし状の葉)が確認されたら、幼虫の除去や薬剤散布を行う。

ホームページを
チェックだモン！



©2010 熊本県くまモン

9 テンサイモグリハナバエ

A 発生生態

- 1 春まき及び秋まきに発生する。
- 2 生育初～中期の発生は被害が大きい。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 被害を回避するため、10月中旬から翌年の2月上旬までには種し、は種期をずらす。
- 2 シロザ、アカザ等に寄生するので、ほ場周辺のこれらの雑草を除去する。